

## 59

ピセツキー 『イタリア服飾史』ローマ帝国滅亡より19世紀に至るイタリア服飾の推移を多くの図書はいうに及ばず、未刊の資料や図版により克明に記述した学術書

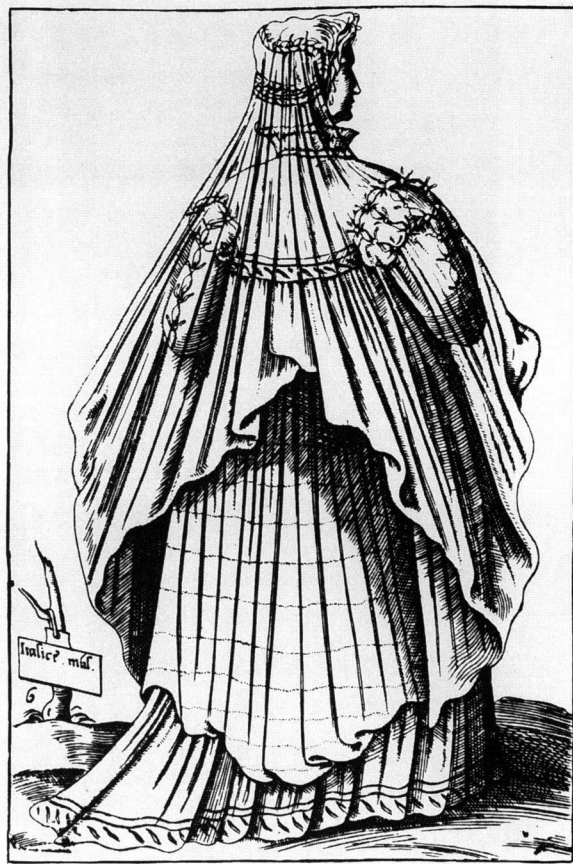
全5巻

**Pisetzky, Rosita Levi. Storia del costume in Italia.** 5vols. [a cura di] Fondazione Giovanni Treccani degli Alfieri. Milano, Istituto Editoriale Italiano, 1964—1967. 32.0×23.4 cm <383.137-P>

イタリアの服飾史は、近年ますます多様になってきた色調によって、芸術的興味の対象となってきたが、今までイタリアには優れた本が見当らなかった。恐らく素材の質が外見上はとるに足りないものであっても、個人の人格にとっては意味があり、従ってイタリアのモードに課された様々な性格についての完全で綿密な研究がなされなかったし、無視できない社会生活の側面がとかく、忘れられなかったとしても、少なくとも不当に扱われてきたからであろう。不当にというのは、服装のモードは、人間の性格の純粋に外面的な動機からだけではなく、社会的条件、特に、文化的風土、趣味、傾向、一時的な虚栄心の反映でもあり、これらは常に意味をもっているが、この面の追究が従来余りなされなかったからである。

何世紀もの間作られてきた服飾を語るには、このような意味で一般に考えられるほど簡単ではない。何故ならただ単に服飾をその外見からだけ述べればいいのではなく、社会生活につながるダイナミックスの中で得られた適確で真の意味を解明する必要があるからである。こうした服飾史は、極めて広い範囲の認識を考察しなければならないから、経済、歴史、芸術に触れる必要がある。つまりイタリア文化史の複雑な様相を織込んでいかなければならないのである。

このような条件を完全に満たす本を書くには、ピセツキー女史こそ最適の人物であり、彼女が20年以上かけてイタリアの服飾を熱心に研究した成果が本書に結実している。彼女は時には大図書館でも発見できない古文書・貴重書の他、未刊の図版をも駆使して、この優れた5巻の大著が出来上がった。女史は、数年前『ミラノ史大百科事典』に服飾の項を執筆しており、その学識には定評がある。この仕事はトレッカーニ財団の多大の協力のおかげで達成された。慎重な資料の選択と優れた多くの図版とで、この本は長く後世に残るであろう。(植田)



10図 フェルディナンド・ベルテッリ作『現代諸国民の衣装』の中の「ローマの女性」1563年  
ピセツキー 『イタリア服飾史』第2巻所収 →59